

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p> <p>聴覚障がいのある幼児・児童・生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p> <p>【数値目標】 「学校が楽しい」への肯定的回答100%</p>	<p>めざす子ども像</p>	<p>【知】あそぶ・学ぶ・学び合う子 【徳】やさしく・かかわる・つながる子 【体】元気でやりぬく子</p>	<p>今年度の基本方針</p> <p><基本方針> 1. 子どもが主役となる授業づくりと確かな学力の定着 2. 友だちやまわりの人に進んでかかわり、仲間としてつながろうとする態度の育成 3. 心と体を鍛え、健康増進・体力向上に努める態度の育成 4. 自立と社会参加をめざしたキャリア教育 5. 子どもと向き合う時間を充実するための業務改善</p>		<p><本年度の合言葉> 「真心・笑顔・感謝」 <学部テーマ> ○幼稚部…「にこにこ・わくわく・なかよし」 ○小学部…「レッツ・チャレンジ」 ○中学部…「レッツ・エンジョイ」 ○高等部…「ドリームズ・カム・トゥルー」 ○支援部…「レッツ・ビー・トゥギャザー」</p>
---	----------------	---	---	--	---

年 度 当 初				評 価 結 果 (2)月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	改善方策
<p>1. 子どもが主役となる授業づくりと確かな学力の定着</p> <p>【数値目標】 「授業が楽しい、よくわかる」100%</p>	(教務) (1)個別の年間指導計画を指導と評価・改善に生かす。	(1)単元(小中高)や活動(幼)のねらいに対して観点別の評価だけではなく、指導の振り返りや「つまずきの記録」を記述式で記載していくことが定着しつつある。また、新指導要領対応の新しい形式に作り替えたり、研究や通知表等と連携して活用したりすることで指導に活かす資料として機能しつつある。しかし、作成に時間がかかりがちであったり内容にばらつきや偏りがあつたりすることが課題である。	(1)記述欄の内容のばらつきや偏りをなくし、個別の年間指導計画を指導、評価、改善に活用し、PDCAサイクルを定着させ、授業に活かしている。	(1)職員会や校内掲示板等を通し、個別の年間指導計画の運用や記載の仕方について説明したり、記入例を提示したりすることで共通理解をはかる。 (1)記載状況を定期的に確認し、指導に生かすために学期末のまとめ記載ではなく、章や単元の区切りごとの記載を促す。 (1)個別の年間指導計画について、新指導要領対応の新しい形式を作成する。	(1)左記の方策によって共通理解をはかり、必要に応じて教務部員が各学部で説明を行うことでスムーズに運用されている。また、学部ごとにケース会議を開き、個別の教育支援計画や通知表と連携して活用できつつあり、指導に活かせる資料になってきている。 (1)教務部員が学期に2~3回程度、記録等を点検をし、記載を働きかける連絡をすることで定期的に記載することができた。それによって、教員が自らの授業を振り返る中で指導、評価、改善に活用できるようになってきた。	B (1)年度当初の教科等の目標では、個別の教育支援計画における一人一人の幼児児童生徒の目標や実態を加味した内容を記載していく。 (1)引き続き、点検や記載を働きかける連絡を定期的に行い、PDCAサイクルの定着を進める。 (1)高等部では来年度から学年進行で新指導要領に移行していく。年度始めに学部全体で新・旧指導要領の適用学年と教育課程を確認したり、県主催の教育課程研修会に参加したりしながら新指導要領へのスムーズな移行を図りたい。
	(研究) (1)聴覚障がい教育の専門性の向上を図る。	(1)聴覚障がいのある幼児児童生徒それぞれの個に応じた指導を行うことが求められており、聴覚障がいに関する職員研修や一人1授業、参観ウィークなどを行い、授業力の向上に努めている。	(1)聴覚障がい教育に関する基本的な考え方や手法について教職員で共通理解ができている。 (1)教職員の授業力について振り返り、教師の授業力が向上している。	(1)職員研修及び学部研究会で活発に話し合いをする。 (1)一人1授業を推進したり、参観ウィークで相互に評価したりする。 (1)鳥聾スタンダードで自己チェックをして、意識を高める。	(1)研究テーマ「子どもが主役となる授業づくり～遊びや教科学習を通して伝え合う力を育てる～」に沿いながら、中学部の音楽の研究授業を全職員で参観し、研修をした。筑波技術大学の長南浩人先生から指導助言をいただき、子どものやり取りを大切にすることが授業力向上につながることを学んだ。 (1)鳥聾スタンダードは浸透しつつある。	A (1)学部ごとに教科指導の中で特に研究していく取組を重点におきながら、さらに研究の焦点を絞っていききたい。
	(研究) (2)幼児児童生徒一人一人の実態やニーズを総合的・多面的にとらえ、一貫性と一丸性のある指導と支援をAPDCAサイクルで行う。	(2)聴覚活用や認知特性などの実態は多様であり、そこに起因するコミュニケーションや言語獲得・拡充の困難さがあり、また基礎学力の定着にも課題を生じている。	(2)遊びや教科学習を通して伝え合う力を育てるための指導・支援方法を工夫している。 (2)幼児・児童・生徒の言語概念や思考力を育成し、的確な意思の相互伝達が行われている。	(2)子どもが主役となる授業が、どのような授業か考え、伝え合う力をつけるために、どのような力が必要か各学部ごとに話し合っている。 (2)一人1授業で指導案を検討し、発問や教材・教具の工夫など指導や支援方法を考える。 (2)学部の実態や教科の特性に応じ、伝え合う力を育てるために授業づくりや活動の工夫について考える。	<全体>(2)一人1授業は全体の8割程度実施でき、学部研究や専門性向上に役立った。 <支援部>(2)学部研究では事例研を通して支援内容や方法について具体的な研修を行った。 <幼稚部>(2)一人1授業は予定通り実施し、それぞれの授業研の事後研で話し合いを深めることができた。幼児期における話し合い活動についての資料を読み合い実践に活かせるよう話し合った。 <小学部>(2)一人1授業は全員実施し、学部研究では、事例の検討を行いながらよりよい学習支援のあり方について考えることができた。 <中学部>(2)学部研では、対象学年を指導支援の方法や内容について考え共通理解に努めた。 <高等部>(2)教科のグループごとに一人1授業の指導案を検討したり事後研究会を持ったりして研究を推進した。	B <支援部>乳幼児教育相談と通級で、「子どもが主役となる授業づくり」を意識して、自立活動など、できることを深めていく。 <幼稚部>今年の研究をさらにステップを上げて、子どもどうしのやり取りが活発になるような支援の工夫を考える。 <小学部>計画段階からPDCAサイクルを意識したものにしていきたい。自分の思いは表現できるので、相手に伝わっているか意識する手立てを工夫していく。 <中学部>学部全体での取組を深められたが、教科における研究実践の方法を検討したい。「伝え合う」までの知識技能の習得と考察に焦点をあてて、さらに深めていく。 <高等部>教科指導を意識した研究テーマの焦点化をしていく。
<p>2. 友だちやまわりの人に進んでかかわり、仲間としてつながろうとする態度の育成</p> <p>【数値目標】 「自分にはよいところがある」80% 「友だちのよいところをみつけている」80%</p>	(自立活動部) (1)自立活動の指導を円滑かつ効果的に行うことができるよう、教育環境や教材教具、年間指導計画の整備に努めるとともに、専門性を高めるための職員研修を行う。	(1)発音、言語、障がい理解等に関する職員研修や勉強会を行っている。 (1)自立活動の指導に関わる教材教具の整理に努めているが、データ教材の整理が不十分である。 (1)自立活動指導内容を一覧にした自立活動指導段階表や、教材や題材を一覧にした自立活動指導プログラムを作成しており、今後も適宜見直し、修正を行っていく予定である。	(1)職員一人一人が、自立活動(聴覚障がい)に関わる専門性を高め、学校全体で教材、教具を共有、活用し、教育活動全体を通じて、自立活動を踏まえた指導にあたる。	(1)自立活動の専門性を高めるための全体研修会を年2回、言語もしくは発音に関する内容を取り扱う自立活動勉強会を年3回行う。 (1)学部を越えて、教材教具を共有できるように、教材教具と管理場所の一覧表を掲示する。 (1)使いやすいデータ教材の管理方法について、各学部の意見を集約しながら検討し、試行していく。 (1)自立活動段階表や自立活動指導プログラムの活用状況について意見をまとめ、必要に応じて見直し、修正を行う。	(1)予定通り、自己理解・障がい認識の全体研修会を1回、発音に関する全体研修会を1回行った。自立活動勉強会を3回実施したが、グループによっては必要に応じて2回実施となった。 (1)教材教具の管理場所一覧表の周知を行い、活用されている。 (1)データ教材の管理方法を自立活動部内で共通理解し、データの整理を行った。 (1)活用状況への意見をまとめ、必要な箇所については修正を行った。	B (1)今後も、今年度と同程度の研修機会を設定し、職員の希望を聞きながら、ニーズに応えられる研修内容にしていく。 (1)今後も一覧表の追加、削除などを適宜行いながら、継続して活用していく。 (1)来年度始めに、データ教材の管理場所の確認と管理方法を提案し、活用していく。また、活用方法を着任者研修で伝えたり、よりよい活用方法について職員の意見を聞いて検討したりしていく。 (1)今後も追加、削除などを適宜行いながら、継続して活用していく。
	(生活安全部) (1)児童会・生徒会において、児童生徒が計画に基づいて見通しを持って活動していけるように指導・支援する。 (2)幼児児童生徒の社会性を育てるため、全校の縦割りグループの活動を充実させる。	(1)児童会・生徒会役員になった児童生徒は、その責任を果たそうとしている。話し合いにおける活発な意見交換や見通しを持って活動を進めていくこと、また個々の意見を取り入れてより良いものにまとめていくことについてはまだ教職員の支援が必要である。 (2)全校での縦割りグループの活動を実践していることから昼休憩に体育館で小中高等部の児童生徒と一緒に遊ぶ姿が見られる。教師の支援により、中高等部の生徒が企画して、全校幼児児童生徒の縦割り小グループのレクリエーションを進めることができる。	(1)児童生徒が自ら計画を立て、児童会・生徒会活動に主体的に取り組む。学校生活の充実と向上のために、児童・生徒会長や役員を中心に相談しながら協力して活動を進める。 (2)高年齢の生徒は、全員が楽しく活動できるためのルールや役割を自分たちで工夫し、グループでの話し合いや活動をリードする。低年齢の幼児児童生徒は、異年齢の友達と一緒に活動する楽しさを感じながら、高年齢の生徒をモデルとして友達と関わる力を高めていく。	(1)児童会・生徒会の活動の見通しが持てるよう、年間計画の作成について助言する。役員の児童・生徒が話し合いを行うときは、話し合いの進め方に関する助言を行ったり、具体例を提示したりすることで生徒が選択や決断を下すことができるよう支援を行う。 (2)毎月1回全校の縦割りグループで活動する「いきいきタイム」を設定し、できるだけ生徒の力で企画、進行できるように最低限の助言を行う。毎月の活動を続けるとともに、全校レクリエーションなどの行事でも縦割りグループを活かした内容を取り入れ、異年齢交流を充実させる。学期ごとにアンケートを取り、活動の内容や方法を振り返りながら取り組みの改善を図る。	(1)全校で集まり、弁当を食べてレクリエーションを行うなど、生徒自ら企画して活動に取り組む姿勢が多く見られた。年間計画についても、より活発な活動になるよう、生徒が進んで検討している。イベントの企画へのアンケートや生徒会黒板の利用で生徒全体の意見を集めるようになってきた。 (2)いきいきタイムは月1回のペースで行い、3~4人の小グループに分かれて活動している。中高等部の生徒が活動内容や進行の仕方を相談し、幼稚部・小学部の教師が助言することで、グループ全員が楽しめる活動になっている。学校祭前には折り鶴を集めた制作活動に取り組み、作品を完成させた。	B (1)生徒それぞれの得意なことを活かし、全員が主体的に取り組めるよう、行事での役割分担や活動の進め方について助言する。 (2)校舎内に各グループの活動の様子を掲示し、全校で取り組もうとする意欲を高める。全校幼児児童生徒、教職員にアンケートを取り、活動の内容や方法を振り返りながら取り組みの改善をしていく。

年 度 当 初					評 価 結 果 (2)月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
3. 心と体を鍛え、健康増進・体力向上に努める態度の育成 【数値目標】 「自分のめあてをきめて、からだづくりをして」 80%	(生活安全部) (1)学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を3本の柱として、心身の健康、交通事故や災害・事件からの安全確保、健康的な食生活について様々な行動を計画し、生活安全部の職員、学級担任を中心に指導を行っている。 【数値目標】 「自分のめあてをきめて、からだづくりをして」 80%	(1)学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を3本の柱として、心身の健康、交通事故や災害・事件からの安全確保、健康的な食生活について様々な行動を計画し、生活安全部の職員、学級担任を中心に指導を行っている。 (2)1人1台端末環境・デジタルコンテンツの活用・プログラミング教育の充実をめざすGIGAスクール構想に対応するようなICT活用推進が国の政策として進められている。併せて、グローバルな視点とクリエイティブな能力を持つ人材育成のための情報教育の充実が各学校に求められている。	(1)心身の健康、交通や災害・事件からの安全確保、健康的な食生活について理解を深め、健康で安全な生活習慣が身につくように日常的かつ継続的に指導に取り組み、実践力を高める。 (1)発達段階に応じて、自分の聞こえから生活の中での安全を守るための環境や対処方法を理解する。	(1)学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画の中から本年度の重点取組項目を8項目決定し、事前の打ち合わせと事後のアンケートや部会による振り返りを通して、課題を明確にし、その後の取組に活かせるようにする。 (1)交通安全指導や災害時避難訓練の事前事後指導で、具体的な場面において、自分の聞こえと安全確保に必要な環境や対処方法について問いかけて助言する。	(1)火災避難訓練を行い、幼児児童生徒は真剣な態度で訓練を行った。避難時の集合や点呼の仕方について、アンケート結果とともに検討した。地震避難訓練では津波に対する避難も取り入れ、災害に対して幅広い対応を試みた。 (1)歯科検診の結果をもとに学校歯科医の助言を受け、個別の歯科指導を行った。指導後に行動の変化が見られたり、2回目の歯科検診で結果が改善したりした。保健委員会の活動で歯磨き週間を企画した。 (1)交通安全運動期間中にバス停での乗車指導を行い、児童生徒の交通安全やマナーに注意する意識が見られた。発達段階に応じて、自分の安全を守るための方法を担任が指導した。	B	(1)避難訓練での避難時の集合や点呼の仕方について検討したことを課題として、より安全な避難経路や避難体制を確立する。不審者対応研修での警察の助言を参考にして課題に取り組む。 (1)単年度の取組みとして終わらないよう、次年度も継続した取組みを行う。 (1)引き続き各学部で交通安全指導を実施し、より発達段階に応じた交通安全の知識や安全確保の技能の向上を図る。
4. 自立と社会参加”をめざしたキャリア教育 【数値目標】 「将来のゆめがある」 100%	(総務・情報部) (1)学校内外の広報活動を推進し、本校教育の理解と啓発を図る。 (2)情報機器の適切な維持・管理に努めると共に、ICT教育を推進し、生徒及び教職員の、社会人として必要な情報リテラシー(情報活用能力)の習得・向上を図る。	(1)新型コロナウイルスの影響により、豊学校のセンター的機能の一環として、聴覚障がいや豊教育の理解と啓発を行う機会を持つことが難しい現状がある。 (2)1人1台端末環境・デジタルコンテンツの活用・プログラミング教育の充実をめざすGIGAスクール構想に対応するようなICT活用推進が国の政策として進められている。併せて、グローバルな視点とクリエイティブな能力を持つ人材育成のための情報教育の充実が各学校に求められている。	(1)ポスター掲示やお便りの配布、ICT等を駆使して、豊教育・聴覚障がい・手話などの情報を発信する機会を増やす。 (2)ICT教育に関する情報提供・研修設定(プログラミング教育のための支援やGIGAスクールに対応するためのコンテンツを用いた学習を進めるための方策等)を本校の実情に応じて行い、職員や子どもたちの知識・技能を高めることで授業の質の向上や業務や学習の効率化につなげる。また、本校情報発信ツールを用いて情報発信を行う。	(1)月ごとの手話紹介ポスターの作成と掲示、鳥ろう便りや龍文の作成などを行い、近隣の公民館や、幼児・児童・生徒の交流校、関係諸機関等に配布して、手話・聴覚障がいに関わる理解・啓発を進める。また、学校HPや「鳥豊チャンネル」等のWEBやオンデマンドも広く有効的に活用した情報発信も行う。 (2)外部機関(ICT支援員・GIGAスクール推進課・特別支援教育課等)との連携を図りながら、ICTを活用した教育の取り組みを職員と情報共有を行いつつ進める。また、家庭のICT環境の実態把握、職員対象のGIGAスクール関連コンテンツの研修会なども実施する。また、本校からの必要な情報発信を本校公式WebページやYouTubeチャンネルを用いて行う。	(1)月ごとの手話紹介ポスターの作成と掲示は年間を通して、定期的に行うことができた(あおば地区公民館で手話ポスターを掲示)。 (2)ICT教育推進のためのツールとしてグーグルワークスペースの活用に向け、自主学习会や外部講師を招聘して研修を実施できた。 小学部プログラミング学習はICT支援員の協力と助言を受けて取り組むことができた。ICTを活用した授業展開も充実してきた。 グーグルミートを初めとするソフトを活用したリモート学習・研修が多く実施できた。また使用法を理解し、対応できる職員が増えた。 その他、ホームページによる学校行事・学習活動の様子発信は適宜行うことができた。	B	(1)手話ポスターによる啓発は継続して行う。ICT環境をさらに整えて、それを活用したろう教育ならびに手話言語の啓発・普及の取組に成果を求めていく。 学校HPや鳥豊チャンネルを活用したろう教育や手話に関する情報発信については次年度に引き継ぐ。 (2)グーグルミートなどのリモートツールを活用しやすい環境整備に努める。併せて、グーグルワークスペースの様々な機能についても、有効な活用を進める。また、ICT活用のマナー・ルールについても学習を進めた。
	(進路) (1)キャリア教育や進路に関する情報を発信する。 (2)実態や発達段階に合わせて、社会人として必要な力をつけていけるようにする。	(1)各学部で取り組まれているキャリア教育の内容を他学部へ発信している。 (1)最新のキャリア教育の動向について情報を提供していく必要がある。 (2)卒業生の状況について知る機会が少ないため幼児・児童・生徒に還元して十分に活かすことが難しい。	(1)進路だよりを発行し、各学部のキャリア教育取組状況の共通理解を図る。 (1)大学や企業、関係機関が進路担当へ向けて発信する情報を適切な場面で提供したり、キャリアパスポートを活用することで児童・生徒の指導や支援を工夫・改善する。 (2)先輩の話を開く会や生徒向けの進路研修会の内容を指導や支援に活かす。	(1)進路だよりを発行し、各学部のキャリア教育の取り組みについて内外へ発信する。 (1)保護者が進路について気になっていることなどの意見を吸い上げ、必要な情報を個別に提供する。 (1)進路学習や実習でキャリアパスポートを活用し現在の課題や良い面などを保護者と共有することで本校の子どもの支援に生かす。 (2)高等部が実施する「先輩の話を開く会」や「進路研修会」の内容を教職員に周知する。	(1)新型コロナの影響で縮小した行事や取り組みもあったが、進路だよりを発行し、各学部のキャリア教育の取り組みや進路関係の行事の報告をすることができた。また、学校に送られてくる進路関係の情報はその都度校内に発信した。 (1)関係機関と連絡を密にとり、大学入試に向けての情報提供や希望進路に合った企業見学や実習を実施し、必要な情報が必要な生徒や保護者に伝わるよう努めた。 (2)フォローアップを行い、卒業生の状況の把握や支援、職員への情報提供に努めた。また児童生徒が学習の記録を積み重ねることができるようキャリアパスポートを作成し、保護者にも見てもらうことで課題の早期把握や指導に活用した。 (2)「ごうぎんチャレンジドとっとり」の方に「働くために必要なこと」というテーマで生徒・保護者・教職員対象に進路研修会を実施した。	B	(1)生徒・職員・保護者の要望に応じて適切に情報提供をする。 (1)ノーツ掲示板や進路室前の掲示等を使用して情報発信する。また、各生徒のニーズに合わせた企業見学や実習の内容の充実を図る。 (1)卒業生のフォローアップの情報は学部回覧や進路だよりを活用して情報発信する。 (2)現時点で必要な情報は何かをしっかりと検討し、有意義な時間となるよう進路研修会を計画する。
5. 子どもと向き合う時間を充実するための業務改善	(1)個々の時間外業務の削減目標の年度目標の達成 (2)校務分掌の見直しと業務の削減及び環境整備	(1)年度当初や学校祭等の学校行事が実施される月には時間外業務45時間以上の勤務者が若干見られる。 (2)昨年度より各分掌や各学部で業務の見直しと削減を実施しているが、環境整備による業務効率化も進める必要がある。	(1)全職員の時間外業務年間360時間以内となる。 (2)会議の効率的な運営と精選、機能的な環境整備が進んでいる。	(1)職員朝会や終礼のあり方を検討・改善する。 (1)月ごとに全職員の時間外勤務の状況を確認し、業務調整等を行う。 (2)各部署での会議の効率化(1時間以内)を基本とした改善を進める。 (2)職員作業等により校内の環境整備を行う。	(1)職員朝会は、感染状況や対策に関する連絡を職員に周知するために、時間が長くなるがあった。効率的な運営をする意識は定着しつつある。 (1)月ごと及び年間で時間外勤務の多い職員の状況を確認し、個別に面談や医師への相談を行った。 (2)職員会等全職員の参加する会議は勤務時間内に終了することができた。	B	(1)朝会や終礼等の持ち方についてよりよい方法を引き続き検討する。 (2)組織の業務分担の確認と整理を行い、効率的な校務実施と時間外勤務の削減に努める。

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%） C：変化の兆し（60%） D：まだ不十分（40%） E：目標・方策の見直し（30%以下）